

**確定**

20160212

# 第 14 回 文京区医師会学術集会 抄録

平成 28 年 2 月 13 日 (土)

於 文京区医師会館 1F ホール

**第 I 部** 座長： 太田 修司 (歯科医師会) 内田 美行 (看護ステーション)

## 1. 「糖尿病関連歯周病のスクリーニング検査」

医療法人社団 LSM 寺本内科・歯科クリニック 西嶋 智子、寺本 民生、寺本 浩平

内科医が歯周病を疑う際の簡便なスクリーニング法について検討したので報告する。

方法：糖尿病患者（以下 DM）18 名、及び歯周病治療中の患者 2 例において口腔内潜血反応、歯周病関連病原菌の抗体検査を施行した。歯周病については重症度を 3 段階表示で判定した。結果：DM 患者の口腔内洗浄液で、尿検査用試験紙で潜血反応陽性者は、すべてヒトヘモグロビンモノクローナル抗体反応も陽性であり、擬陽性は認められなかった。これらの患者は、全員が歯周病と診断された。また、歯周病に関連する *P. gingivalis* (*P. g.*) に対する抗体が 2 症例を除いてすべて陽性であった。一方、歯科において、歯周病と診断された 2 例についても口腔内洗浄液潜血反応、*P. g.* 抗体とも陽性であった。結論：歯周病のスクリーニング検査として、口腔内洗浄液の尿検査による潜血反応という簡便な方法が有用であることが示された。

## 2. 「要支援の糖尿病事例」

龍岡訪問看護ステーション 柳澤 敏江

自立した生活を送れているようであるが、持病である糖尿病の管理ができない。一人暮らしということや人との付き合いの関係で、外食が多く偏った食事になりがちで、内服薬の管理もできていない。

個人の意思とプライドを尊重しながら、私たち訪問看護師がどのように関わっていくべきか、介護保険の認定が要支援ということで単位数も少ないために訪問看護に与えられた単位数の範囲内でよりよいケアができるように、関係者との連携を図ったが、それぞれの職種の方の事例対象者に対する理解不足もあり連携がなかなかうまくいかず苦慮したケースです。

### 3. 「経過の長い難治性褥瘡の看護ケア」

千駄木訪問看護ステーション 根本 万里子

年々在宅療養者が増える中、当ステーションでも徐々に医療ニーズが高まり、癌末期、難病、精神障害者、重症心身障害児など多様なケアが求められ対応するための技術の取得、柔軟な体制作りも重要な時代となっています。近年の医療保険利用割合も10年前に比べ1割ほど増加してきています。

今回はその医療保険利用者の中でも経過の長い難治性褥瘡の症例を報告いたします。腹部大動脈人工血管置換術後の対麻痺による下半身麻痺であり、改善するまでに長い期間を要しています。現在に至るまでの経緯を「ずれ力」に焦点を置いて経過を報告します。介護力の少ない条件の中で、いかに「ずれ力」の影響を回避するかを考え、最新のエアーマットの検討や圧抜きの実施を本人と話し合いながら進めていきました。今も進行形ですが更なる改善を模索しています。

### 4. 「歯はなぜ存在するのか？抗重力を意識した歯科治療と全身との関わり」

中島矯正歯科クリニック 中島 榮一郎

歯がなぜ存在するのか？という疑問には“咀嚼のため”、という即物的な目的だけでなく、我々がこの地球上で生まれ生存してきた歴史そのものに関連している。

たとえば、第一大臼歯に注目すると、単に第一大臼歯の上下関係だけではなく、頭蓋骨や頸椎を含めた頭蓋全体のバランスの中で、上顎第一大臼歯が側頭窩下の直下に位置したときに、下顎の第一大臼歯が1咬頭近心にある場合の関係が最も安定する。だから、上顎の第一大臼歯がどこにあっても下顎の第一大臼歯とI級関係であればよい、というものではなかった。Angleが定義した位置に上下の第一大臼歯があるとき、重力の元での歩行や咀嚼、外力からのからの応力を頭頂部に向けて減衰していくシステムが最も効果的に働く。これは最終的には脳機能を守ると考えられている。このことが矯正のみならず歯科治療全体の意義を再認識し、歯科医療の未来への展望を拓く糸口になるであろう。この観点に立って行ってきた臨床例も示しながら、この古くて新しい概念を一人でも多くの仲間に伝えたい。

### 5. 「地域包括型支援に向けた歯科医師会としての取り組み」

～区民の訪問歯科診療ニーズにどう応えるか？～

文京区歯科医師会 寺本浩平 安東治家

要介護高齢者が増加の一途を辿る反面、施設や病院の十分な増設は見込まれていない。そのため、在宅医療に代表される地域包括型支援の充実は急務の課題といえる。歯科の立場からすると「誤嚥」や「肺炎」も深刻であるが、それ以前に療養患者における口腔内の惨状には目を見張るものがある。しかし、訪問歯科を行う医院は18%未満と言われ、地域での依頼は一部の歯科医院に一局集中している傾向にある。そこで今回、文京区歯科医師会として区民の潜在ニーズに迅速に対応するための一連の取り組みについて報告する。

## 第Ⅱ部

座長： 藤原 直之（医師会） 新井 悟（薬剤師会）

### 6. 「難治性褥瘡患者に対する $\omega$ 3系不飽和脂肪酸の使用による創傷治癒促進の経験」

トータルライフクリニック本郷内科 長屋直樹 穴水聡一郎

創傷治癒期のそれぞれの過程に多くの栄養素が関与する。今回、在宅寝たきり患者に形成された広範な褥瘡に対し、通常の栄養管理に加え、 $\omega$ 3系脂肪酸を豊富に含む家庭用料理油脂の一種である亜麻仁油や EPA/DHA 製剤を加えることにより褥瘡の治癒促進に到ったと思われる事例を経験した。代表的な $\omega$ 3系脂肪酸である EPA が、有効性レベル3で術後創傷治癒促進（アルギニンとの併用）という報告があり、 $\omega$ -3系脂肪酸は、良質な細胞膜の構成要素となり、プロスタグランディンやロイコトリエン系に作用し、抗炎症、NO 産生増加、抗血栓など幅広い生理活性機能を持ち、脂質代謝の改善と動脈硬化進展抑制による臨床応用は有名である。 $\omega$ 3系脂肪酸が豊富な油脂である亜麻仁油などは、スーパーなどで比較的容易に手に入り、経口摂取もしくは胃瘻から簡便に投与できる。難治性褥瘡患者のための追加できる簡便な選択肢の一つとなると思われた。今後も症例を重ねたい。

### 7. 「薬局での服薬介助による介護負担軽減に関する報告」

山松薬局 中野 美樹子

【目的】 調剤薬局での積極的な服薬介助の臨床的な効果を検討する。

【方法】 対象は服薬順守が困難な 86 歳のアルツハイマー病患者である。患者さん専用のお薬カレンダーを薬局内に設置し、開局時間内に薬局で薬剤師と一緒に服薬した。介入前後の家族の介護負担は、Zarit 介護負担尺度を用い、家族と介護支援専門員により評価を依頼した。

【結果】 服薬介助開始後、患者の感情失禁はみられなくなった。家族の介護負担尺度は、介入後に悪化したものはなかった。介入後に改善した項目は、「介護のために自分の時間が十分にとれない」、「自分の思い通りの生活が出来なくなった」、「患者に対してどうしてよいか分からない」の3項目であった。

【結論】 調剤薬局によるアルツハイマー病患者の服薬介助が、患者の問題行動を改善し、家族の介護負担度を軽減する可能性が示唆された。

### 8. 「おくすり手帳、薬局アンケートによる検証と今後の課題」

コール薬局茗荷谷店 羽鳥恵理

最近「お薬手帳」は、医療費を安くするにはお薬手帳はいりませんと言いましょうなどと、マスコミに言われる存在になっています。しかし、実際にはその患者に関わる医療者間の情報共有手段として、大変有効です。また、健康情報拠点薬局(仮称)のあり方に関する検討会における、「健康サポート薬局のあり方」の報告の中に、かかりつけ薬剤師・薬局基本機能として

1. 服薬情報の一元的な把握とそれに基づく薬学的管理・指導
2. 24時間対応
3. かかりつけ医をはじめとした医療機関等との連携強化

との記載があります。ここで「お薬手帳」が医療者間の情報共有手段として使われるべきと考えます。そこで、文京区薬剤師会の会員薬局にアンケートを取り、その使用実態を報告いたします。報告事例から、活用方法なども報告いたします。

また、次回の調剤報酬改定で盛り込まれる、電子版お薬手帳についてもご報告いたします。

## 9. 「クラミジア感染症の検査・診断の注意点」

岩瀬クリニック 岩瀬 一

クラミジアトラコマティス（CTと略）は、徴兵検査の最多不適原因となるトラコーマの起因菌であった。1980年代のモノクローナル抗体による検査の出現により、非淋菌性尿道炎とされていた疾患がCTによる感染症と判明した経緯がある。従前は淋病の頻度が高かったが、米国の流行の推移と同様に日本でも、性行動の若年化に伴い、またたく間に性器クラミジア感染症は淋病をぬいて、世界で最も感染者の多い性感染症に進展し、婦人科の代表的性感染症となった。

今回はクラミジア感染症の診断、特にその検査の結果の解釈と治療の現状について発表する。

## 10. 「小児の構音障害について」

本郷耳鼻咽喉科クリニック 木村 美和子

構音障害は、神経筋疾患等でみられる運動障害性構音障害、構音器官の器質的な疾患が原因で生じた器質性構音障害、構音器官に器質的な原因がないにもかかわらず構音に誤りが認められる機能性構音障害の3つに分類される。当院では、その中でも機能性構音障害を中心に言語訓練を行っている。本発表では、具体例を供覧しながら機能性構音障害の概説を行うとともに、当院での取り組みについて報告する。

対象は2014年1月から2015年12月の2年間に当院で構音評価を行った小児症例100名（男児59名、女児41名）である。構音の種類は、発達途上にみられる構音状態が改善しない、いわゆる未熟構音が71名、異常構音のうち、側音化構音は26名、口蓋化構音2名、鼻咽腔構音1名であった。未熟構音に関しては本人や家族の希望があれば言語訓練を行っているが、構音障害が軽度な症例では発達の経過とともに自然治癒することも少なくないため、経過観察となる症例もある。一方、側音化構音に代表される異常構音は自然治癒する可能性が低いため、特別な理由が無い限り経過観察とはせず、言語訓練を行う症例が多い。

平成28年2月13日 文京区医師会 学術集会 抄録

主催：文京区医師会

共催：文京区歯科医師会・文京区薬剤師会・訪問看護ステーション連絡会